

討論＋朗読「現在のアルベール・カミュ」

レイモン・ゲイ＝クロズイエ（フロリダ大学）

ナジェット・ハッダ（アルジェ大学）

フワ＝ユング・キム（高麗大学）

松本陽正（広島大学）

アニエス・スピケル（ヴァランシエンヌ大学）

最後のパネル・ディスカッション「現在のアルベール・カミュ」では、世界各地から招かれた 5 人の研究者たちが、カミュとの個人的な出会いならびにそれぞれの国におけるカミュの受容という二つのテーマをめぐって発言した。最初のテーマをめぐる発言に先立って、カミュ自身の朗読による『異邦人』の冒頭部の録音が流されたが、カミュの声は熱のこもったものであると同時に皮肉っぽいものだった。カミュとの出会いを振り返って、自分自身の歩みを思い起こしたパネリストが何人かいたが、カミュにとってと同様、彼らにとっても学校が、豊かとは言えない環境で過ごした幼年時代との隔絶を、知的レベルにおいても地理的レベルにおいても決定的な隔絶を生じさせたというきわめて重要な役割を果たしていた。また、カミュの戯曲の高校での上演が、カミュ作品に直に触れる機会となったパネリストたちもいた。そして、すべてのパネリストに共通していたのは、大学人として歩んできた中で、強烈な個性（恩師、同僚、友人）との出会いが、決定的な要因となっていることだった。そのような影響をパネリストたちに与えた人々の中には、生前のカミュを知る人もいて、カミュのもつカリスマ性を強調していたとのことだ。パネリストたちの目には、カミュは兄弟のような存在、情熱的で、エネルギーで、自己自身に対してはもとより社会に対しても明晰に判断を下す作家と感じられているようだ。

続いて、『反抗的人間』によって引き起された一連の論争が終焉にさしかかった頃の未公開インタビューの録音が流されたが — このインタビューは『アルベール・カミュの現在』（*Présence d'Albert Camus*）の次号に掲載予定 —、パネリストたちからは、これは本から得たフランス語であるとの指摘があった。すなわち、カミュの他のインタビューにもしばしば確認できることだが、モハメッド・ディブの場合と同様、学校教育をとおして学んだ言葉の徴がここにも認められるとのことである。そのようなインタビューの多くには口頭の特徴はなく、その源には書かれたものから得たものがあるとの指摘が何人かのパネリストからなされた。

このパネル・ディスカッションの二番目のテーマである、カミュ作品の現在の受容についての報告から、少なくとも 4 ヶ国で、知識人のみならず大衆の間でもカミュ作品への関心が高まっていることが明らかになった。例外は、日本だろう。日本ではカミュは相変わらず何よりも『異邦人』の作家であるが、若者たちのカミュへの関心はきわめて低い。2006 年に上映された『カミュなんて知らない』という映画のタイトルがそれを証している。こ

のことは日本の若者たちに一般的に見られる文学離れを映し出しているだろう。それに対し、たとえばフランスでは、カミュへの回帰が明瞭に見て取れるし、とりわけ 1994 年の『最初の人間』の刊行以降、その傾向が顕著である。フランスではカミュは、万人に先駆けて正しかった一人の知識人としてよりはむしろ、「真実を語り」そしてイデオロギーには絶対に取り込まれまいする、親しみのもてる兄弟のような存在として捉えられている。アルジェリアでは、カミュは今ではアルジェリア人に自分たちの国のことを語ることのできる存在として広く認められている。アラビア語によるカミュ作品の翻訳が待たれている。韓国の中学や高校のカリキュラムに見られるカミュの受容は、次第次第に国際化へと向かっているこの国の翻訳に関する政策の変化と軌を一にしたものとなっている。アメリカ合衆国では、カミュは相変わらず数多くの批評・研究の対象となっている。豊饒な文献目録がそれを証している。世界各地から来たパネリストたちの報告が一とおりに終わった後、翻訳の問題について、とりわけ印欧語から遠く離れた言語すなわち日本語、韓国語、アラビア語における翻訳の問題について議論が集中した。この問題は、別途、シンポジウムのテーマとなりうるものだろう。ここでは、日本語について、時として翻訳者が新たに創らざるをえなかった言葉が日本語の中に徐々に定着してきている、とする会場の一人からの楽観的な気持ちにさせてくれる指摘のみ記しておきたい。

パネル・ディスカッションならびに二日間にわたるフォーラムの最後に、1957 年のノーベル賞受賞時のカミュの演説の中から、真実に立脚する芸術家の創造者としての自由に関する考察ならびに芸術家その中に身をおく共同体との連帯に関する考察とを収めた録音が発された。